

別れからの学び

—動物飼育学級における子どもの言語生活誌—

山崎 花奈子

1. はじめに

本研究は、動物飼育学級における児童から生まれる言葉の内実を解明しようとするのが目的であり、特に動物飼育における別れの場面が児童にどのような経験や対象動物との関わりをもたらし、言葉や行動を表出させていくかを、児童を抽出し事例分析を通して追究した。

はじめに、対象学校の取り組み及びミニブタを飼育している対象学級の動物飼育の実態を捉えた。また先行研究に見られる動物飼育の意義の整理から、実践報告のほとんどが学級全体の取り組みについて述べられており、特定の児童に焦点を当てた観察がなされていないことを言及した。次に、対象学級において、3つの別れの場面ごとに抽出児童を設定し、動物との別れにおける児童の行動及び発話の観察を行い、児童がどのように別れを経験しているかを考察した。そして、別れの場面においては対象動物以外の関係性が持ち込まれることを言及した。また、別れにおいて発せられる児童の言葉によって、児童が対象とどのような関係をもつのかを捉え、さらにその関係が築かれた背景の一端を明らかにした。児童の詳細な行動及び発話を観察することで、児童の言葉はその場面において一面的に捉えられるのではなく、児童が生きる世界、築く関係の中で生まれることが明らかになった。

2. 研究の実際

2. 1 別れから捉える言葉の実相

2. 1. 1 記述資料及び抽出児童

N小学校3年2組で飼育しているミニブタ,児童,教師の関わりによる,抽出児童の言動解釈を試みる場面記述においてはマイクロ・エスノグラフィーを用いる。箕浦康子(1999)は,エスノグラフィーとは「他者の生活世界がどのようなものなのか,他者がどのような意味世界に生きているかを描くこと」であり,「その人たちが世界をどのように見て,何を喜び,どのような行動をとるのか,その背後にあるその人の文化を描くことである」と述べている(1)。フィールドワークによって,質問紙調査や面接といった方法では取り出せない「その人の生きている文脈ごと(2)」人の日常行動の背後にある文化を抽出し,記述する方法である。人間行動の社会的文脈性を重要視したヴィゴツキーの影響を受けたValsiner(1987)は,子どもの行為が,常に変動する文脈に拘束され,道具や他者に媒介され短時間のうちに変化する性質であることを「マイクロジェネティック」といい,そうした最小の行為を分析単位として,発達現象を子どもの生きている文脈もろとも研究する視座を提案した(3)。箕浦は,この視座により一定の社会構造のなかで展開する人間行動に注目して,「マイクロジェネティック・データをとるフィールドワークとそれに基づくレポート」をマイクロ・エスノグラフィーと呼ぶと述べている(4)。マイクロ・エスノグラフィーは本研究において,子どもの行動解釈を行う際に有効な方法であると判断する。

観察の記述については,2013年7月,10月,11月に不定期で学級での観察を行い,主に朝の会から給食前まで観察を行った際の記録ノート,授業及び談話VTRを用いる。授業時間中のメモの他,観察者が持つビデオカメラ1台による記録を行っている。撮影した映像とメモをもとに挙手発言以外のつぶやきや行動を含めて記した談話記録を作成し分析を行う。

児童については,子ブタとの別れ,父ブタとの別れの場面において,特徴的な別れが観察され得た児童を抽出する。死別については,学級で共有する意識として全体像を述べる。7頭の子ブタとの別れについては,最後の2頭と別れる場面での1人の児童をもって論じていく。

2. 1. 2 「これが最後なんだよ」ダイキにとっての別れ

ここでは,総合的な学習の時間「スクと元気とお別れ」において,7頭の子ブタのうち最後に残った2頭である「スク」と「元気」との別れを

取り上げる。児童は子ブタを小屋の外に出し、庭を走り回り、その後小屋でえさや水をやりたり体を撫でてお別れを伝えたりした。最後にクーちゃんファミリーの歌を歌った。抽出児童であるダイキは、野球が好きな男児で、友達と野球の話をするのが好きである。両親と2人の弟がおり、ペットは飼っていない。生まれた当初からスクを可愛がり、相棒と認識している。ミニブタの「スク」は大人しく、児童は優しいミニブタだと認識している。

【表1 ダイキ、教師、児童の主な行動】(抜粋)

	時間	主体	ダイキ及び教師、児童の行動
1	0:02:00	ダイキ	元気、スクを小屋から出し、庭で一緒に走る。スクを追っている
2	0:19:02	ダイキ	スクの隣に座り込んで撫でる
3	0:19:14	ダイキ	「あーあー！」と、大きな声を出す。スクが離れていくのを見る
4	0:19:22	ダイキ	スクを後ろから押して、えさの方に追い立てる
5	0:19:49	ダイキ	後退するスクをおさえる
6	0:19:54	ダイキ	スクが下がるのを、手を離して見る
7	0:25:48	ダイキ	「スク～、お別れなんだよスク。(この続きは不明)」話しかけながらスクを撫でている(歌を歌っている可能性もある)
9	0:25:38	T	「生まれたときのことを歌にしたんだけど、どうして歌詞にしたんだっけ？」
10	0:26:07	ダイキ	「ス～く～[(何かを語りかけているが聞き取れず)]」
11	0:26:22	ダイキ	「分かった？スク」
12	0:26:30	T	「この仲間と歌えるの最後なんだよね。誰に向けてとかじゃなくて、今日は、元氣と、スクに向けて最後のみんなの歌声を、届けて欲しいっていうか、届けようね」
13	0:27:26	ダイキ	「スク。これが最後なんだよ」
14	0:27:38	T, C	クーちゃんファミリーの歌を歌う。ダイキは歌いながらスクを追い、撫でる
15	0:35:26	C	歌を歌い終わる。児童が教室に戻り始める

16	0:35:25	ダイキ	「じゃあね、スクもうお別れなんだよ」スクを撫でる
17	0:35:32	ダイキ	「お別れなんだよスクたーん」スクの顔を見ながら撫でる
18	0:35:54	C1	「あ～スク～鼻スタンプ～」
19	0:36:23	ダイキ	スクの隣にしゃがみ込んで「おい鼻スタンプ！」と言い、スクを撫でる
20	0:36:52	ダイキ	小屋の外に目をやった後、スクを見ながら撫でる
21	0:36:59	ダイキ	しゃがんだまま、離れていくスクをぼうっと見る
22	0:37:27	ダイキ	笑顔で「今度はげんちゃんの鼻スタンプ」と言う
23	0:37:31	ダイキ	「くれた～鼻スタンプくれた～」と元気を撫でながら言う
24	0:37:47	ダイキ	スクの方に移動し、鼻に手を当てた後、手を見て擦る
25	0:38:22	ダイキ	柵に上り、スクを見ながら、柵を降りる
26	0:38:33	ダイキ	「てれてれてってーん」柵の外からスクを撫で、教室に戻る
27	0:38:36	ダイキ	立ち上がって教室に戻る

【注：T=教師，C=児童全体，C1=特定の児童 [] =聞き取り不可能な発言】

(1) スクへのもどかしさ

女兒の「あ～スク～鼻スタンプ～」という声を聞いて、ダイキはスクを追って立ち上がった。ダイキは自分も鼻スタンプをしてもらおうと思ったのだろう。スクの隣にしゃがみ込むが、スクはなかなかしてくれない様子で、ダイキは「おい鼻スタンプ！」(19)と強めにスクに言っている。この後「今度はげんちゃんの鼻スタンプ」(22)と発言していることから、この時スクに鼻スタンプをもらったのだろうと考えられるが、特に喜んだりしていない。そして離れていくスクをしゃがみ込んだまま見て、その後しばらく寝床の方をぼうっと見つめていた。ダイキはたくさんスクに気持ちを伝えてはいるものの、スクからの反応があったり、当然言葉が返ってきたりすることはない。「お別れなんだよ」と2回繰り返したり、「スクたーん」と強く呼びかけている姿から、「スクは本当に分かっているの？」という、もどかしさを感じているのではないかと捉えた。

(2) げんちゃんの鼻スタンプ

そして離れていくスクに何もせず、じっと座ったままどこかを見つめている。寂しそうな背中であったが、そんなダイキに元気が近寄って、ダイキの手に鼻をすりつけると「今度はげんちゃんの鼻スタンプ」(22)と、筆者に明るい表情を見せた。ずっと無表情で笑顔を見せることがなかったダイキが、初めて見せた笑顔であった。そして立ち上がり元気を撫でながら「くれた～鼻スタンプくれた～」(23)と、元気に話しかけるように優しく嬉しそうな声で言った後、すぐにスクの方に向かい、スクと触れ合った。

このわずか 30 秒ほどの間で、離れていくスクを見てぼうっとしていたダイキが、思いがけず寄って来た元気の鼻スタンプによって笑顔になり、スクとの別れに踏み出すことを決心できたのではないかと考える。

ダイキはスクを追い続けていた。そして他の児童のようにあっさりとは別れられず、小屋に残った。動物という相手に思いが伝わっているのか分からない状況では、ダイキは別れに踏み切れなかったのではないか。しかし、元気との触れ合いによって背中を押され、再びスクの元に行き、離れることを決心したのではないかと捉えた。執拗にスクを追い続ける姿から一見スクにしか関心がないようにも思われるが、元気をきっかけにしてスクとの別れを受け入れていくことができたと考え、元気の偶然の鼻スタンプは、ダイキにとって意識されずともダイキの心に大きな影響を与えたと言えることができる。

(3) 動物に言葉をかけること

「お別れなんだよ」「これが最後なんだよ」と、小さな声でスクに語りかけるダイキは、スクとのつながりの中で初めて大きな別れを経験しようとしていた。「スクは自分とお別れをすることを分かっているのだろうか？」という気持ちで何度もそのことを確認し、スクに分からせるように言葉を発しているように見えた。言葉を理解しない相手に言葉をかけることは、意味の無いことなのだろうか。ダイキには、自分の思うように動いてはくれない、また言葉の通じないスクを目の前にしながらも、「お別れなんだよ」という言葉をかけずにはいられない思いがあったのではないかと考える。

ヒト以外の動物（ペット動物）への人間の共感性を明らかにした藤崎亜

由子（2004）は、人が対象に言葉かけを行うことについて「対象に言葉をかけるという行為は、まず相手が何らかの意味でコミュニケーション可能な他者であることに賭けてみるという試みとして捉えることができるだろう」と述べており、また問いかけについて「自ら問いを発することにより、相手の行為の意味を読み取ろうとしているものと考えられる。つまり、未だ自分にとって不定な解釈を、不定なまま相手に委ねることにより、何かの意味を顕在化させるきっかけとして機能しているのではないか」と述べている。ダイキの場合、習慣としてミニブタに関わる際に言葉をかけていると考えられるので、ミニブタは全くコミュニケーションが成り立たない存在ではなく、「コミュニケーション可能な他者である」と認識しているのではないか。そして「分かった？スク」（11）と問いかけることで、別れだということを知っているのかという不定の解釈をスクの反応に委ね、反応から問いの答えを得ようとしている。しかしダイキが意味を得られるような反応が返ってこなかったため、その後の「スク、これが最後なんだよ」（13）「じゃあね、スクもうお別れなんだよ」（16）「お別れなんだよスクたん」（17）という言葉かけにつながったのだと考える。

（4）ミニブタに語りかける児童

子どもの発達における動物の役割に焦点を当ててきたメルスン⁽⁵⁾は、人にみられる動物との対話について「対話を可能とする動物については、面白いことに、園児たちは、飛んでいるトリや木の上を跳ね回るリスなどの、周りにいる野生動物を見るときや、学校で飼っているウサギのような小動物を抱くとき、ほとんど話しかけない。もし話しかけても、その話しかけは対話とは似ておらず、親密な対話は『愛する自分の動物向け』のようである」と述べている⁽⁶⁾その語りかけは「特徴として、会話形式をとる。（中略）たいてい質問するかのように高い抑揚で話を終え、『空想の答え』のための間を空けながら」話しかけると説明している⁽⁶⁾。さらにこの「空想の答え」については「人は、ジェスチャーや表情や声を、言葉に解読することで、この『非言語的コミュニケーション』を『その言語に相当するもの』として解釈することに、魅力を感じるようである」と指摘している⁽⁷⁾。また、「空想の答え」の受け取りに関して「動物の沈黙は『同意』であり、動

物の体の動きや声は『励まし』として、受け入れられる」と述べている⁽⁸⁾。動物に名前をつけ、愛情を持って関わることで、その関わりの中で自然に語りかけが行われ、反応を読み取って解釈し、その経験を繰り返すことで愛情がさらに深まっていく。こうして人は動物と自分との間に絆を感じていくのである。

ダイキのエピソードでは、別れに際して自分の言葉をミニブタのスクに伝えたいダイキの姿を述べてきたが、メルスは「自分が言うことを、ペットがそっくりそのまま理解はできないと、ほとんどの子どもはわかっているが、子どもたちは、聞いてくれ、理解してくれているような気持ちになっている」と述べている⁽⁹⁾。ダイキの場合、普段えさをあげる際の「スクー、食べてね、おいしい？」という声かけ⁽¹⁰⁾に対して、ダイキが差し出したえさを食べるスクという「非言語的コミュニケーション」を、例えば「おいしいよ」という「その言語に相当するもの」として解釈していたのではないかと考えられる。しかし、「別れ」を理解させようとするダイキにとって、その反応は当然ながら返ってくることはなく、「伝えたいのに、伝わっていない」という葛藤をもってスクに接していたのではないかと考える。「別れ」とい喪失を前に、今まさに伝えて分からせ、自分の望むような反応をさせたいと思うけれど、どうしようもない状況が現実としてそこにある。言葉を理解できないと分かっているにもかかわらず聞いてくれて理解してくれていると思えるような存在であったミニブタが、やはり簡単には通じ得ない存在であることをダイキは感じていたのではないか。

2. 2 別れに見られる言葉の表出

ここでは、児童の発話に焦点を当て、2つの言葉から児童と対象との関係を明らかにし、別れに対する認識を考察する。

2. 2. 1 「スク」という呼びかけ

この時間にダイキが発した主な言葉を挙げていくと「スク～お別れなんだよスク」(7)「スクー～」(10)「分かった？スク」(11)「スク、これが最後なんだよ」(13)「じゃあね、スクもうお別れなんだよ」(16)「お別れなんだよスクたーん」(17)と、ほぼ全てでスクの名前を口にしており、

スクに向かって呼びかけていた。

これほどまでに名前を呼ぶのは何故だろうか。2. 1. 2の(1)で、スクはダイキの思う通りには反応してくれないということを述べた。理想とする反応は返ってこないものの、名前を必ず口にするには「スクに言っているんだよ」と伝えたい気持ちが強いことの表れであろう。また、単にダイキから言葉をかけるに留まらず、スクからの反応が欲しいために、注意を引きつけようとしている可能性もある。

この場面では元気、スクという2頭の子ブタとの別れであるにも関わらず、ダイキは「スク」という名前しか発していない。2頭の別れという状況の中にいるが、ダイキが別れようとしているのは「スク」だけなのだ。「もうお別れなんだよ」「これで最後なんだよ」は、この部分だけ取り出すと元気、スク双方への言葉として捉えることができる。しかし、「スク」と呼びかけることで「スクへの言葉」として限定される。ダイキが何度も名前を呼ぶことから、これまでの関係において、スク1頭との関わりがいかにか強かったかということを確認させられ、その強さゆえに、別れの言葉をどうしてもスクに伝えたいという思いが受け取れる。

2. 2. 2 「鼻スタンプ」

2. 1. 2の(2)において、「鼻スタンプ」が、ダイキが別れに踏み出すきっかけになったということを述べた。ここではくらしの中で作られた「鼻スタンプ」ダイキの「鼻スタンプ」に関する言葉を考察する。

まず、ダイキは女兒の「あ～スク～鼻スタンプ」という言葉を聞いて、ダイキは「おい鼻スタンプ!」とスクに強く迫っている。他の児童に鼻スタンプをしたことに対して、「ぼくにもしてよ!」という強い思いがあったのだろう。児童にとって「鼻スタンプ」とは、「もらえる嬉しいもの」であり、「レアなものだ」という認識がある。そしてミニブタとの絆を感じられるものである。また、学級での飼育による「1頭のミニブタ対多数の児童」という関係においては、他の児童ではなく、ぼくにくれたという価値も内包していると考えられる。「おい」と強く呼びかけるダイキの言葉には、自分が「鼻スタンプ」をもらえないことへの悔しさが表れている。

その後、座り込んでぼうっとするダイキに、子ブタの元気が思いがけず

「鼻スタンプ」を押すと、驚きながら、柵の外にいる筆者に笑顔で「今度はげんちゃんの鼻スタンプ！」と言った。そして「くれた～鼻スタンプくれた～」と言いながら元気を撫でた。「ほくにくれた！やった！」という喜びが感じられる。喜びを自分で噛み締めるだけでなく、外にいる筆者に伝えたくなるほどの嬉しさなのだ。「くれた～鼻スタンプくれた～」という言葉には「鼻スタンプをくれてありがとう」というスクへの気持ちと、「ほくにくれた」という、他人に知らせたい気持ちが表れている。言葉の通じない動物からの思いがけないアクションは嬉しいものであり、それが価値をもつ学級で「鼻スタンプ」をもらったダイキは、元気と自分のつながりを感じることができ、自分がかわいがっていたスクの元に行くことができたのだろう。

2. 2. 3 別れから捉える言葉

抽出児童及び学級での発言の言葉の考察から、「別れ」の場面においては、別れようとする対象動物以外の関係性や感情が持ち込まれることがあり、教師、他の児童、別れる対象ではない動物との関わりによって「別れ」の状況が作られることが分かった。また、別れにおいて発せられる児童の言葉の背景を推察すると、児童が対象とどのような関係をもつのか、さらにその言葉が他との関係性を含んで発せられることが明らかになった。児童の言葉は、その場面において一面的に捉えられるのではなく、児童が生きる世界、築く関係を大いに反映していることを認識することで、教師がどのように共にあるかという姿勢も変わると言えるだろう。

3. 今後の課題

今後の課題として、以下の3点を挙げる。

①児童の変化、成長を捉えるための継続的な視点

日々の暮らしとして展開される動物との関わりにおいては、継続的に児童を深く捉えていくことで児童の経験やそれがもたらす成長を明らかにすることが必要である。自分が教師になった際に、本研究で一場面を切り取って得た見方をさらに深めながら継続的に児童と経験の関係を捉えていきたい。

②動物飼育経験における教師の関わり

児童の行動を追う際に、やはり関わってくるのが教師という存在である。動物飼育において、教師は指導者ではなく、児童と共におり、同じ経験をする者という認識を持った。この点についても考察に至らなかったため、「教える」「教えられる」関係でないフィールドでの教師と児童のあり方について考えていきたい。

【謝辞】

調査協力を受けてくださった信州大学附属長野小学校の畔上一康副校長先生、学校に伺うたびに声をかけてくださった宮下昭夫教頭先生はじめ多くの先生方、いつも快く受け入れてくださった3年2組の御手洗博一先生と子どもたちに、心より感謝申し上げます。ありがとうございました

-
- (1) 箕浦康子 (1999)『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィ入門』ミネルヴァ書房, p.2
 - (2) 同上, p.2
 - (3) Valsiner, J. (1987) *Culture and the development of children's action*. New York : John Wiley & Sons, p.75
 - (4) 箕浦康子 (1999)『フィールドワークの技法と実際—マイクロエスノグラフィ入門』ミネルヴァ書房, p.3
 - (5) G.F.メルスン (2007)『動物と子どもの関係学—発達心理からみた動物の意味—』ビイング・ネット・プレス, p.86
 - (6) G.F.メルスン (2007)『動物と子どもの関係学—発達心理からみた動物の意味—』ビイング・ネット・プレス, p.84
 - (7) 同上, pp.84-86
 - (8) 同上, p.87
 - (9) 同上, p.91
 - (10) 注記：筆者観察中の、えさをあげる場面での言葉がけである。えさをあげることは日常の仕事であるため、ダイキはスクにえさをあげる際に習慣的に言葉をかけていると判断する。

【参考文献】

- ・ G.F.メルスン (2007)『動物と子どもの関係学—発達心理からみた動物の意味—』ビイング・ネット・プレス
- ・ N小学校2学年会「2学年だより」平成24年6月27日 No.56
- ・ N小学校学校だより (平成24年10月)

- ・ Valsiner, J. (1987) Culture and the development of children's action. New York : John Wiley & Sons ,p.75
- ・ 青木真由子・土井進 (2007)「附属長野小学校 2003 年度卒業生の総合学習に関する事例研究--6 年間の総合学習によって『身についた力』」(『教育実践研究』8, 信州大学教育学部附属教育実践総合センター,pp.72-82)
- ・ 稲垣忠彦ほか (1992)『シリーズ授業 6 生活科 紙を作る・ヤギを育てる』岩波書店
- ・ 牛山栄世 (2001)『学びのゆくえ—授業を拓く試みから』岩波書店
- ・ 佐藤学 (2004)『授業を変える学校が変わる』小学館
- ・ 佐伯胖・藤田英典・佐藤学 (1995)『シリーズ学びと文化 2 言葉という絆』東京大学出版会
- ・ 嶋野道弘 (2006)「命の教育の充実と動物飼育」(『学校・園での動物飼育の成果—心・いのち・脳を育む—』全国学校飼育動物研究会, 緑書房)
- ・ 全国学校飼育動物研究会 (2006)『学校・園での動物飼育の成果—心・いのち・脳を育む—』緑書房
- ・ 高木展郎 (2003)『ことばの学びと評価』三省堂
- ・ 中川美穂子 (2006)「愛情飼育の教育的な意義—年齢に合った目的と手法の工夫を」(『学校・園での動物飼育の成果—心・いのち・脳を育む—』全国学校飼育動物研究会, 緑書房)
- ・ 中川美穂子 (2007)「小学校における動物飼育活用の教育的効果とあり方と支援システムについて」(『お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要』4, お茶の水女子大学, pp.53-65)
- ・ 秦恭子 (2004)「児童の言語生態研究会の実践研究についての一考察—意識と無意識を含み込んだものとしての<ことば>と向き合うということ—」(『全国大学国語教育学会発表要旨集』107, 全国国語教育学会, pp.87-90)
- ・ 藤岡久美子 (2013)「子どもの発達と動物との関わり:動物介在教育の展望」(『山梨大学大学院教育実践研究科年報』4, 山梨大学大学院教育実践研究科, pp.4-11)
- ・ 藤崎亜由子 (2008)「人はペット動物の『心』をどう理解するか:イヌ・ネコへの言葉かけの分析から」(『発達心理学研究』13, 日本発達心理学会, pp.109-121)
- ・ 松本みゆき (2008)「生活科における動物飼育の現状と課題」(『生活科・総合学習

研究』6, 愛知教育大学生生活科教育講座, pp.97-104)

- ・松本みゆき・野田敦敬 (2009) 「生活科における生命尊重の教育についての一考察—飼育活動から精神的な自立へ—」(『愛知教育大学研究報告』58, 愛知教育大学大学院, pp.1-9)
- ・箕浦康子 (1999) 『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房
- ・森省二 (1993) 『「別れ」の深層心理』講談社
- ・若狭蔵之助 (1986) 『子どもと学級 生きる力を育てる』東京大学出版会

(やまざき かなこ 信州大学教育学部附属長野小学校)